

横山ゆずり作 「親友 III」

< 前編 >

- (効果音) (授業終了のチャイム。教室のガヤ)
「バイバーイ」ねえ、今日帰りに、どっか寄ってこ！」いいよ、駅前に新しくできたお店、行ってみようよ。」
- 溝口洋介 ふあー、やっと終わったあ。よし、今日も気合い入れて部活行くぞ！ 6時間も授業受けてると、ほんとマジ疲れる。
- 佐野勇二 何言ってるんだよ、洋介。お前はずっと寝てるだけじゃん。部活の時だけ元気になるんだからな。
- 洋介 いいのいいの、堅いこと言わないの。勇二ちゃん、テストの前にはノートのほう、よろしく頼みますよ。
- 勇二 冗談じゃねえよ。調子いいんだから。ったく。
- 洋介 ほら、グダグダ言っていると、先行っちゃうぞ。
- 勇二 あ、おい待てよ、洋介…。
- (効果音) (2人、ドタバタ出ていく。)
- 女子 あの2人って、ほんと、いいコンビ。時々、仲がいいんだか悪いんだか分からなくなるけど、でも何だかんだ言っても、いつもくっついてんのよね。
- 浜田弘美 まるで漫オコンビだよ。性格は正反対なのにね。
- <タイトル>
ナレーション ここは青春高校 2年B組。うわさの漫オコンビこと、溝口洋介と佐野勇二は、ともにサッカー部に席を置く、悪友同士。憎まれ口をたたき合いながらも、いつも一緒という仲なのです。
- 女子A 溝口君てさあ、「思い込んだらまっしぐら」っていう、もろ体育系のノリだし、佐野君はどっちかって言うと、落ち着いた優等生タイプじゃない？ おかしな取り合わせって感じ。あの2人、幼なじみかなんか？
- 弘美 そうじゃないらしいよ。うちの高校で初めて会ったんだって。それがさ、きっかけが面白いんだ。あの2人、入学早々大ゲンカしたんだって。原因はちょっとした意見の食い違いだったらしいんだけど、議論しているうちに2人とも熱くなってきちゃって、もうつかみかからんばかりって感じで。
- 女子A へえ。溝口君なら分かるけど、佐野君も…。
- 弘美 うん。でね、その後、お互いに、「こんなに本気になってケンカしたの初めてだ」とか言って、かえて気が合って仲良くなっちゃったらしいよ。
- ナレーション そう言ったのは、同じクラスの浜田弘美でした。彼女は、日曜日には教会に通うクリスチャンでした。
- 弘美 ほら、「雨降って地固まる」ってやつよ。

女子A あ、弘美。そっか、弘美は溝口君と幼なじみだっけ。

弘美 ま、腐れ縁だけだね。

ナレーション その日、洋介と勇二が部活で汗を流した後のこと。

勇二 あのさ、洋介。お前を親友と見込んでちょっと相談があるんだけどさ。

洋介 おれに相談？ ちょ、ちょっと待て。へ、へ、へ、ヘックション！（派手にクシャ）
ヨああ、まただれかおれのうわさしてるな。どこの女子だろ。モテる男はつらいなあ。

勇二 バーカ。ただの風邪だろ。お前ね、何か勘違いしてんじゃないの？ みんながお前の回りに集まんののはな、人気があるからじゃないの。お前はお調子もんだから、なんか面白いこというんじゃないかって期待されてるだけ。はっきり言って、“お笑い芸人”と同じだぜ。

洋介 ひでえな。親友に向かってそこまで言う？

勇二 こんなこと、おれだから言ってやるんだぜ。ありがたいと思えって。

洋介 ちえ！ ところで、何だよ、勇二？ おれに相談って珍しいじゃん。お前のほうからおれに相談持ちかけるなんてよ。

勇二 うん、まあな。こういうことにかけては、お前のほうが詳しいからな。

洋介 ン？ 何だよ。もったいぶってないで、早く言えよ。

勇二 うん実はさ…。（口ごもる）実はな…。

洋介 何だよ。はっきり言えってば。…あ、勇二。もしかしてお前、彼女できたとか？ 凶星だろ！ そうだろ！ 何だよ、おれを差し置いて、勇二、やるなあ、このやろ、このやろ！ おい、相手はだれだよ。言えよ。悦子か？ 美樹ちゃんか？ それともアツ子？

勇二 おい、落ち着けよ。お前が興奮してどうすんだよ。うちのクラスの子じゃないよ。それに、彼女ってわけじゃないんだ。おれが勝手に「いいな」と思ってるだけなんだから。

洋介 どっちでもいいって。そんで、相手はだれ？

勇二 うん、F組のさ。

洋介 うんうん、F組の？

勇二 …赤坂、赤坂由梨絵。

洋介 赤坂？ 赤坂由利絵？ 知らねえなあ。まあいいや。明日早速見てきてやるよ。

勇二 余計なことは言わないでくれよ、洋介。

洋介 分かってるって。とにかくおれに任せとけよ。お前のために一肌脱ぐぜ！

ナレーション それから2、3日たったある日。

弘美 洋ちゃん、どうしたのよ。浮かない顔しちゃって。

洋介 え？ 別に。何でもないよ。

弘美 ウソウソ。何か落ち込むことあったんでしょ。

洋介 分かる？

弘美 当たり前よ。あんたは単純で、すぐ顔に出るんだから。

洋介 弘美にはかなわねえなあ。ガキのころから知られてるからな。

弘美 そういうこと。それで？ 落ち込みの原因は？ 佐野君とまたケンカでもした？

洋介 いや、ケンカならまだいいんだけどさあ。

弘美 なあに？ ずいぶん歯切れが悪いじゃない。あんたらしくないよ。

洋介 うん、実はさ。こないだ、勇二から好きな女子のこと打ち明けられてさ。おれも気が早いから早速その子に話しちゃったわけよ。そしたらさ、何と、その子がおれに... (言葉を濁す)

弘美 分かった！ そしたらその子、佐野君じゃなくて、洋ちゃんのことが好きだって言ったんじゃないの？

洋介 すごい。よく分かったな。

弘美 そこまで聞けば、女子ならピンと来るわよ。それで、どうすんの？

洋介 どうって、それが分かんないから悩んでんじゃねえか。

弘美 あんたの気持ちはどうなのよ。その子のこと、どう思ってるの？

洋介 うん、今までは知らなかったんだけど、話してるうちに、何となく...

弘美 好きになりかけてるんだ。

洋介 ...かもしれない。

弘美 だったら決まり。自分の気持ちに正直になったほうがいいよ。

洋介 そんなことできるわけねえだろ。親友を裏切ってまで...

弘美 あ、それって、ちょっと違うんじゃないかなあ。友達に悪いからあきらめるなんて、佐野君も喜ばないんじゃないかなあ。

洋介 何でだよ。あいつが先に思ってたんだから、あいつに譲るのが筋ってもんだろ？

弘美 おかしいよ、そんなの。第一、何よ、譲る譲らないって、サッカーのボールみたいに。女の子はモノじゃないんだからね。

洋介 分かってる。だけとお前と話していると、なんか頭の中が少しずつ整理されてくるな。さすが聖書研究会だな。

弘美 やめてよね、そういう言い方。あんただって、小さいころ、一緒に教会学校に行ってたじゃない。その時に習ったこと、覚えてないの？ 「自分にしてほしいことは、人にもそのとおりにしなさい」って。洋ちゃんが佐野君の立場だったら、どうしてほしいかって考えたほうがいいよ。

洋介 そっか。言ってる。...けど、...けどさあ、そりゃそうかもしれないけどさ。...あーあ、男の友情はつらいよなあ。

ナレーション 浜田弘美は、洋介の幼なじみ、というよりも、幼稚園以来、洋介のお姉さんのような存在でした。いつも、理路整然と物事をとらえ、適切なアドバイスをしてくれる弘美は、洋介にとって、頼りになる存在でもあり、また時には煙たい存在でもあり

ました。
それからしばらくしたある日　。

勇二　洋介。今日、帰りに話があるから。
ナレーション　と、何やらただならぬ声で勇二が声をかけました。そして、その日の部活が終わると　。

男子A　じゃ、これで今日の練習は終わり。ありがとうございました。
一同　ありがとうございました。
洋介　勇二、おい勇二ったら。何だよ話って。
勇二　着替えたら、校門のところで待ってる。
洋介　なんだ、あいつ、深刻な顔しちゃって。
（効果音）　（下校時のガヤ）
洋介　改まって話って、何？
勇二　洋介。お前、この間のこと、彼女に言っただろ。
洋介　彼女？
勇二　とぼけるなよ。赤坂さんだよ。
洋介　あ！
勇二　余計なこと言うなって言っといたじゃないか。おまけに...。
洋介　おまけに、何だよ。
勇二　彼女、言ってたよ。「自分は本当は溝口君に好意を持ってたし、溝口君も実はそうなんだけど、友達に悪いから付き合えないって言われた」ってな。ほんとかよ。はっきり言えよ、洋介。
洋介　ごめん。確かに彼女にはそう言った。でも、それでケリはついたんだから、もういいじゃないか。おれはあきらめるよ。な？
勇二　ふざけるな！　そんなふうに同情されて、おれがうれしいと思うか？　惨めなだけだよ。お前は、おれのためになって思ってるかもしれないけど、そんなのは見せかけだ。自己満足だよ。自分の友情に酔ってるだけだ！　お前と知り合ったころ、すごいケンカして、その時、「こいつはいつも正直に自分の気持ちをぶつけてくるやつだ。本気で付き合えるやつだ」と思った。でも、今のお前は...。まるで安っぽいテレビドラマだ。そんな「親友ごっこ」はたくさんだよ！
洋介　勇二...。
ナレーション　脳天に敵のサッカーボールをまともに受けたように、勇二はぼう然と立ち尽くしていました。

< 後編 >

勇二　洋介、お前は自分の友情に酔ってるだけだよ。自己満足じゃないか。「親友ごっこ」はたくさんだよ！

洋介 勇二…。

ナレーション 溝口洋介と佐野勇二は、青春高校の2年生。共にサッカー部に席を置く親友同士…だったのですが、ふとしたことから、2人の歯車はかみ合わなくなってしまいました。

洋介 弘美。

弘美 あ、洋ちゃん。何よ、またケンカ？

洋介 ああ。今度はほんとにダメかもしれない…。

弘美 何よ、穏やかじゃないわね。

洋介 前に、お前に言われたとおりだったよ。おれは、勇二のためを思って身を引いたつもりだった。でも、あいつにとっては、それは一番つらいことだったんだよな。『お前の自己満足だ』って言われちまってさ、あれ以来、口も聞いてないんだ。

弘美 あーあ。ほんとに痛い目見ないと分かんないんだから、あんたは。ま、男同士だから、そのうちサバサバするでしょ。

洋介 だといいいけどな。

弘美 元気出しなさいよ。ほら、部活でしょ。サッカーだけが洋ちゃんの取り柄なんだから。

洋介 (力なく)うん。

ナレーション ところが、その日の部活が終わろうという時刻になって…。

(効果音) (教室のガヤ)(いきおいよくドアの開く音)

女子A 大変よ！ サッカー部で、今だれが大ケガしたみたい！

一同 (口々に)「え？」「何だって？」「だれが？」

男子A 大ケガって、どの程度だよ。

女子A そんなこと分かんないわよ。ほら、グラウンド見てみなさいよ。みんな集まってるでしょ。

男子B あ、あれ、溝口じゃないか？ あの倒れてるの。

女子A ほんとだ。溝口君だ。かわいそう。

(効果音) (救急車のサイレン音)

弘美 どうしたの一体？

女子A あ、弘美。大変よ。ほらあそこ。サッカー部の練習中、溝口君、大ケガしたみたい。あ、担架に乗せられてる。よっぽどひどいのね。

男子A 一緒に付き添ってくのは、あれ、佐野だよな。

男子B ああ。佐野も、何だか足引きずってないか？

女子A あ、ほんとだ。じゃ2人でぶつかっちゃったのかな。

弘美 (モノローグ)洋ちゃん…。佐野君…。

ナレーション サッカーの練習中に起きた思わぬ事故で、洋介は大ケガをしました。脚の骨折は、思ったよりも複雑で、思いのほか長く入院を強いられました。

(効果音) (病室のドアをノックする音)

弘美 こんにちは。

洋介 はい、どうぞ。…なんだ、お前か。

弘美 あら、「なんだ」はないでしょ。せっかとお見舞いに来てあげたのにさ。

洋介 悪い悪い。

弘美 案外、元気そうね。

洋介 うん、ほかは元気なんだけど、この左脚だけが言うこと聞かねえんだよ。チクショ
ー。

弘美 練習中、ボーっとしてるからよ。佐野君と正面衝突だって？

洋介 うん、っていうか、あいつがシュートしようとしたところに、おれが突っ込んだっ
てとこかな。あ、言っとくけど、わざとじゃないぜ。

弘美 分かってるって。

洋介 あいつ、どうしてる？

弘美 佐野君？ 結構落ち込んでるみたい。責任感じちゃって。

洋介 バカだな、あいつ。突っ込んだのはおれのほうだぜ。

弘美 そうだけど、「でも洋ちゃんが練習中に気を取られちゃうような悩みの原因つくつ
たのは、自分だから」って。

洋介 あーあ、そうやって考えすぎちゃうのが、あいつの悪いとこだよ。もっと単純に
物事見られないのかなあ。

弘美 あんたと違うのよ、佐野君は。ああ見えても意外とデリケートなの。

洋介 あ、それ、もしかしておれが大雑把ってこと？ …言えてるか。それより、来月
の試合、おれが出られなくなって、だれがレギュラーになるんだろうなあ。

弘美 そのことなんだけどさ。

洋介 何だよ、お前。なんか知ってるの？

弘美 実はね、サッカー部の子から聞いたんだけど…。コーチは佐野君に「出る」と言
ったんだって。彼も、あの時ちょっと足ひねったけど、来月の試合なら大丈夫だ
からって。

洋介 そうか、やつ、喜んでるだろ。

弘美 バカね。ケガした友達の代わりに出られて、うれしいわけないでしょ。佐野君、
あんたが治るまでは、自分が出るわけにはいかないって。辞退したらしい。

洋介 マジかよ。やめてくれよ、そういうの。…おれ、そんなの たまんないよ。

ナレーション それは洋介の本当の気持ちでした。勇二が真剣に自分のことを心配してくれて
いるのがジーンとうれしい反面、何か追い詰められたような、何とも言えない重
荷を感じるのです。

(効果音) (病室のドアをノックする音)

弘美 あたし。元気？

洋介 あ、うん。相変わらず。
弘美 今日はスペシャルゲストを連れてきたわよ。
洋介 え？
弘美 ほら、入りなよ。ほらってば。
洋介 勇二...。
勇二 やあ。
洋介 何だよ、水臭いな。そんなとこにいないで、こっち来いよ。
勇二 うん。...洋介、ごめんな、おれのせいで。
洋介 バカ。お前が謝ってどうすんだよ。
勇二 だって、おれがあんなこと言ったから。
洋介 違うって。気にすんなよ。それよりお前、おれに義理立てして、試合に出ないなんて言ってるんだってな。
勇二 ...知ってたのか。
洋介 頼むからやめてくれよ。そんなことされて、おれがうれしいと思ってるのか？「親友ごっこはやめろ」って言ったの、お前だけ。
勇二 洋介...。
洋介 おれ、あん時のお前の気持ち、今初めて分かった気がするよ。あの時、いろいろ悩んでさ、こいつに相談した時に、言われたんだよな、「自分にしてほしいと思ったら...」何だっけ？
弘美 「自分にしてほしいと思うことは、人にもそのとおりにしなさい。」
洋介 そうそう、それぞれ。もしお前が今のおれだったら、同じこと言うぜ、きっと。だから勇二、おれの代わりに試合に出ろよ。
勇二 洋介、だっておれ...。
洋介 頼む、おれのために出てくれよ！
勇二 ...分かった。そうするよ、洋介。
ナレーション それからしばらく洋介の入院生活は続きました。ところが、いくらたっても退院の許可は下りませんでした。
(効果音) (病室のドアを閉める音)
洋介 あ、母さん？ どうだった？ 先生、何だった？
母 ええ、もう少しかかるそうよ。だから我慢して安静にしてなさいって。今無理すると、将来激しい運動できなくなっちゃうんですって。
洋介 ちえ！ もう退屈で死んじゃうよ。
母 洋介。
洋介 ン？
母 実はさっき、担任の山岸先生がお見えになってね。具合はどうかっておっしゃるので、あと1か月半ぐらいは動けないってお話したのよ。

洋介 それで？
母 そしたらねえ。ほら、欠席がかなり長期になってしまうでしょ。だから...もしかしたら進級は難しいかもしれないって。
洋介 ...ほんと？ ダブリかぁ。(力なく...ま、しょうがねえな。
(効果音) (ドアをノックする音)
弘美、勇二 (口々に)こんにちは。
洋介 よお、おそろいで。
母 いつもすみませんねえ。お忙しいのに来ていただいて。それに、授業のノートやら何やら、いつも丁寧に...。
洋介 (かぶせて)あのなあ、勇二。いつもノートとってもらってるけどさ、あれ、もうい
いから。
勇二 何だよ、お前。頭は使わないとどんどんバカになるんだぜ。おれのノートを見と
けばな、いつ学校に戻ってきても、バッチリだからな。
洋介 それが...もう必要なくなっちゃったんだよ。
勇二 え？ どういう意味だよ。
洋介 おれさあ、もう1回、2年生やり直し。出席日数が足りないんだとさ。(わざと明る
く来年はお前さんたちの後輩ってわけかぁ。ま、しょうがねえよな。
勇二 洋介...。
弘美 それ、もう決まりなの？
洋介 うん。おふくろから聞いたんだけど、今日、山岸先生が来たんだって。多分無理だと思うから。
勇二 そっかぁ。(ため息)
洋介 お前が暗い顔するなよな。ショック受けてんのはおれなんだからさ。ま、その分、
大学受験で頑張って、浪人したやつに追いつけば同じことさ。
ナレーション それからしばらく、勇二たちはぱったり顔を見せなくなりました。そして、ようやく
洋介の退院が決まったある日のこと、クラスメートがお見舞いにやってきました。
クラスメートたち (口々に)「溝口、結構元気そうじゃん。」早く出てこいよ。」「ちょっと太ったんじゃない？」「まだ痛んだりするの？」
男子A いつ出てこられるんだよ。
洋介 うーん。あと2週間ぐらいかな。
女子A まだ松葉づえでしょ？
洋介 うん。でも大分うまく使えるようになったよ。学校行っても、来年からお前らみんな
な、“先輩”だな。
一同 (沈黙)
弘美 寂しいよね。うちのクラスから2人もいなくなるなんて。
洋介 え、2人？ だれが？

男子B 知らなかったのか。佐野がさあ、今度アメリカ行くんだよ。

洋介 アメリカ?!

男子A ほら、アメリカのイリノイ州の姉妹校との交換留学制度ってやつ。あの試験がこの前あって、あいつ合格したんだ。だから半年間は行ってははずだぜ。

洋介 へえ、スゲえな。留学かあ。

女子A そ。だけど、その間、こっちも休学するわけだから、帰ってきたらまた2年生からだってさ。

洋介 それじゃおれと同じじゃねえかよ。(モノローグ)あの野郎、やってくれるな。

ナレーション 結局、勇二は姿を見せずに旅立っていきました。そして数週間後、1通のメールが洋介の元に届きました。

洋介 「前略。お前に何も話さずにこっちに来てしまって、怒っているだろ。」当たり前だ、バカ野郎。何々? 「話したら、当前お前は止めると思ったので、事後報告にする。(途中から勇二の声に)...

勇二 ...言うておくが、この留学は、あくまで自分自身のために決めたことだからな。おれもいろいろ考えて、自分で納得のいく答えを出したんだ。ほら、前に、弘美に言われただろう。「自分にしてほしいことは、人にもそのとおりにせよ」って。あの言葉を自分なりに考えてみたんだ。お前はおれにとって、最高のダチだ。それに、ライバルでもある。だから、いつも、対等に付き合っていきたいと思ってる。この数か月、そしてこれからしばらく、お前は進級する仲間をしり目に、かなりの忍耐を学んでいこう。それを思ったら、おれもおれなりに、自分の場所で、精一杯悩みながら、努力しなくちゃならないと感じたんだ。それでおれは旅立った。だから今は、黙っておれの旅立ちを喜んでくれ。」

洋介 勇二、あの野郎、あの野郎、カッコつけやがって。

ナレーション そう言いながら、洋介の目にはキラリと光るものが浮かんでいました。

洋介モノローグ 親友か....

ナレーション 洋介は、ポツリとそうつぶやいたのです。

< 完 >